

みちの 近代

69

高階 絵里加

明治三十七(一九〇四)年、高島屋百貨店大阪支店は、竹内栖鳳、山元春挙、都路華香の三人の京都在住の画家に、ピロ

① 栖鳳と日本絵画の革新

催された「Nihonga 日本画」展において、下絵と完成した綴れ織りとがはじめて並べて展示された。

「雪月花」の下絵を依頼した。世界三景とは主要大陸の代表的風景をいい、栖鳳の「ヴェニス」はヨーロッパを、春挙の「ロッキーマウンテン」は新大陸を、そして華香の「吉野の桜」はアジアを、それぞれ表している。完成した三点の壁掛けは、明治四十三年にロンドンの日英博覧会に出品された。栖鳳と春挙による二点は一九九四年に大英博物館に購入の運びとなり、一九九五年にアメリカのセントルイスで開

催された「Nihonga 日本画」展において、下絵と完成した綴れ織りとがはじめて並べて展示された。

このうち栖鳳の「ヴェニス」の月日は、現在大阪の高島屋史料館に所蔵されており、紙本に水墨で描かれた下絵ではあるが、絵画としてそれ自体完成作品といつてよい品格と調和を持っている。ドガーナ(海の税関)の建物やその奥にドーム型の屋根を見せるサルテ聖堂の横を、大運河がゆったりとアドリア海に注ぎ込み、逆光の中に黒々と濃墨でとらえられた船は、柔らかな夜の光に満ちた画面を引き締めている。

栖鳳にはこの数年前、

「西洋」通して生まれた臨場感



竹内栖鳳「ヴェニスの月」
(明治37年 高島屋史料館所蔵)

明治三十三年から三十四年にかけて渡欧の体験があり、当時ヨーロッパを訪れた多くの日本人と同じように、ヴェネツィアにも立ち寄っている。絵画の題材は目に見えるものだけでなく音楽や文学にも求められるように思う、と語ったこともある。栖鳳の胸には、明治二十五年以来十年近くにわたって『しがらみ草紙』に連載され、明治三十五年単行本として出版され

たばかりの森岡外訳『即興詩人』の一節「エネチアは大いなる悲哀の都なり：日の夕となりて、横糊として力なき月光の全都を被ひ、随所に際立ちたる陰影を生ぜしとき、われはいよいよエネチアの真味を領略することを得たり。死せる都府の陰森の気は、光明に宜しからずして幽暗に宜しければなり」が、思い浮かんでいたかもしれない。

「ヴェニスの月」のことも驚くべき特徴は、その大気と空間表現の見事さだろう。縦二・二メートル、横一・七四五メートルの堂々たる情景を満たす潤潤な大気は、月や建物の輪郭をおぼろげに見せながら、画面をこえて立ちのぼってくるかのようであり、いっぽう水面は、はるか遠くへと奥まってゆくと同時に手前に向かって扇形にぐっと大きく広がって、いつのまにか観客をもその

なかに包み込んでしまふ。この絵の前にしばらく立っていると、あたかも潮の香りをくぐむ微風に吹かれながらすぐ足元にひたひたと押し寄せるさざなみの上をたゆたっているような、軽いめまいに襲われさえする。視覚を通じてわれわれの身体は湿度や大気や光を感じ、まるでその風景の中に実際に身を置いて呼吸しているような気がしてくるのである。このような、臨場感に満ちた、身体的ともいふべき空間は、おそらくは画家の西洋との出会いを通じて生まれたものであった。

(京都大学助教授・近代美術史)



たかしな・えりか氏 1964年生

京都生まれ。東京大学大学院博士課程修了。著書に『異界の海―芳翠・清輝・天心における西洋―』など。